

## 日中近代文学とキリスト教研究

—石川啄木に触れながら—

馮 羽

岩手大学客員研究員 (教育学部)

(2000年10月10日受理)

Feng Yu

A Study of Modern Japanese and Chinese Literature and Its Relation to  
Christianity : With Special Reference to Ishikawa Takuboku

### 研究概要

- I 文学とキリスト教
- II 中国近代文学とキリスト教
- III 日本近代文学とキリスト教
- IV 石川啄木とキリスト教

### 研 究 概 要

本小論では、石川啄木とキリスト教の関係に触れながら、文学、特に日中両国近代文学に対して、キリスト教がどのような役割を果たしたかを探求していきたいと思う。

#### I 文学とキリスト教

キリスト教文化と文学の関係は、文化史と文学史における意義において重大な課題である。

宗教は人類の根源的精神活動として、人類の歴史の過程で特別な地位と働きがある。これに対する如何なる無視であっても、人類文明に対する無知である。宗教に対する評価はその他のすべてのものに対する評価の前提である (マルクス, Karl Marx, 1818-83)。" そうであれば、文学の研究は宗教の研究を避けて通ることがはできない。宗教と文学の関係の研究は、もちろん重要な課題である。

文学と宗教は同じ意識形態に属している。これらと人類の関係は連綿と続いている。人類社会の原始時代には、文学と宗教は更に渾然一体として、不可分のものであった。文学は往々にして宗教の体裁をとり、宗教の伝播過程もまた文学の展開過程である。「宗教は

幻想の太陽である」と言うマルクスの言葉には、最も明確に両者の関係が表現されている。ハイデッカー (Martin Heidegger, 1889-1976) はこのように言っている：

魂の本質は、放浪のうちに大地を探す。それは、魂が詩歌を通して大地に足を下ろし、安住し、大地を救うためである。(『詩の中の言葉』)<sup>2)</sup>

ここで、「魂」は即ち宗教の代称である。

文学の目的は、人類の精神的楽園と運命の意味をさがすことである。

宗教の意味は、人類の魂に替わって浄土を見つけることである。

両者の最終の価値は同じである。

そこで、宗教文化と文学の関係の研究は、形而上学の永久の課題である。

一つの時代の文学と一人の偉大な作家の偉大な作品は、宗教文化の要素と息吹が不可欠である。内在する或いは外在する影響を発現するのは、私達を深く研究対象の世界に入り込ませ、更に正確にその時代の作品を読み解かせる。文学の変化発展の道筋を明晰に見出すことができる。そのうえ、文学の認識を通して、その時代の精神を把握することができる。

キリスト教が始まった時は、紀元一世紀である。始まった時は、キリスト教はわずかにローマ統治時期のパレスチナ地域で苦難のユダヤ人が信仰している宗教の一つにすぎなかった。その後、だんだんにイタリアとヨーロッパの他の地域に広まった。1054年、東派と西派の教会の分裂及び十六世紀マルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) の宗教改革運動を経て、キリスト教は三派に分裂した。即ち、東方教会、プロテスタント (Protestant)、カトリック (Catholic) である。三派は区別があるだけでなく、全て『聖書』を經典としている。『聖書』は神の啓示であり、最高の権威があると思われる。キリスト教の一番大切な教義は「博愛」である。これは神が十字架の上ではっきり表現している真理である。その表明はただ愛と言うものは生活の法則でしかない。また、神、イエスと聖霊は「三身一体」の関係にあり、人間は神が創るだけでなく、生まれつき持っている原罪 (original sin) がある。それが苦難に落とし入れる。ただ、キリスト教を信じるなら、救いを蒙り、永久に生きながら得ることができる。

キリスト教文化と西洋文化はずっと親密で息のびったり合う関係を保っている。キリスト教は西洋文化の大きな根源である。キリスト教の歴史の曲折によって、キリスト教の西洋文化に対する影響は複雑である。中世期、キリスト教の禁欲主義と硬直化し生命力を失ったスコラ哲学の多重した悪魔の影は、当時の文化を平板で蒼白にした。しかも、文芸復興時期には、無論ラファエロ (Raffaello Sanzio, 1483-1502) の『マリヤの像』、ボッカチオ (Giovanni Boccaccio, 1313-75) の小説『デカメロン』、ミルトン (John Milton, 1608-74) の『失楽園』等は、全てキリスト教の言葉、熱情や『聖書』の物語りを借りて、自分のヒューマニズムを表現した。十九世紀から二十世紀にかけて、キリスト教は日毎に硬直化の形式を抜け出し、現代生活の活発性を持ち合わせ、そのニュートマス主義哲学は、「あの世の超自然的な力」を追求する現代主義文学に影響した (例えば、象徴主義、神秘主義等)。

キリスト教の文化変遷を見ると、最も顕著な点は、キリスト教の精神と実質がすでに西

洋文化の血脈の中に潜んでいるということである。また、人々の倫理観、価値観と感情形式を支配している。キリスト教は西洋文化の欠くことができない一主流である。

## II 中国近代文学とキリスト教

中国のキリスト教の歴史は、次の四項に大きく分けて概観することができる。

第一は唐代より元代にわたるネストリウス (Nestorius, 380-450) 派すなわち景教の伝道であり、中国に伝えられた最初のキリスト教として注目すべきものである。

第二は、元代に始まるカトリックの伝道であり、特に明末より始まったイエズス会 (ジュスイット会・耶蘇会) の伝道は、西洋文化の導入をともなったから、宣教師文化として、中国文化史の上にも多大な影響をおよぼした。明清時代に来華したイエズス会宣教師の中国語による著作は日本にも舶載され、鎖国体制下の日本知識人に、西洋文化の一端を知らしめたことは注目すべきである。しかしイエズス会を中心とするカトリック伝道も、典礼問題によって清朝皇帝の不興を招き、十九世紀前半までは布教が禁止されていた。

第三は、清朝に始まったプロテスタントの伝道である、十九世紀初頭以来来華した宣教師による聖書の中国語訳や、教会学校の建設、医療伝道の発展は注目すべきである。なおカトリック、プロテスタントともに、十九世紀前半までは、禁教下の秘密伝道であったが、アロー戦争の結果としての天津条約、北京条約によってキリスト教の布教が公認され、教勢はいちじるしく発展するにいたった。

第四は、二十世紀以降の現代中国におけるキリスト教である。十九世紀後半以降におけるキリスト教の発展は、欧米資本主義国家の進出と結びついている一面もあったから、中国人の民族的自覚が高まるとともに、反キリスト教運動も激化するにいたった。しかしながら一方においてはキリスト教土着化の運動も漸進的に進められており、中国のキリスト教は新しい段階にさしかかっているといえよう。

中国だけではなく、コロンブスの新大陸発見以来、航海術の発達につれて、特にイギリスの資産階級革命の興起により、キリスト教の影響はヨーロッパを超え、アメリカ、アジアとアフリカへ浸透した。キリスト教の一層の世界化につれて、西洋文化も世界の各地に入っていった。それゆえに、キリスト教は世界へキリスト教の神と『聖書』啓示をもたらすと同時に、西洋文明の中の科学、理論、民主主義と人権をももたらした。

世界の範囲で、十九世紀は西洋を中心とした理知と情感を広め、個性を突出させ、価値観を再構築した世紀だと言えるだろう。人々は斬新な時代背景の下、再び宗教の意味と価値を見直した。宗教はひとの宇宙に対する思考、人に対する独特な認識、芸術美に対する追求を表し、人間の本質を表現していると考えられる。

二十世紀初頭の中国で、文化界、思想界の先駆者魯迅 (Lu Xun, 1881-1936) は最初にキリスト教のため名を正した。1907年に彼は書いた文章の中で、ヘブライ文学は「たくさん人の信仰と教戒に触れている、文章は深淵で荘厳であり、宗教の意味や文学の表現の源泉である。人の心を潤し、いまでも勢い良く発展している」と称賛した。また彼は知性的慧眼により、敏感に悪魔と悪魔派詩人の疲弊し果てた民族精神を盛り立てる作用を察し、

個人主義思想により、「旧習」、「虚飾」、「悪習」を駆逐しようと思っていた。

1919年「五四新文化運動」時期、陳独秀（Chen Duxin, 1880-1942）は『キリスト教と中国人』（雑誌『新青年』1919-5）と言う文章の中で、それ以前のキリスト教が中国で数百年の伝道をしたが、中国人にあまり大きな利益をもたらさなかった原因を分析した。彼はキリスト教文化の中国での曲折した運命を把握し、中国人のキリスト教排斥は、実は中国と西洋文化の本質的な衝突の現れであるとした。そこで、陳独秀はキリスト教精神を賛美し、キリスト教の美、信、愛の実質により、中国の文化の中の冷淡さ、虚偽を明らかにした。キリスト教の純粋な感情により、中国文化の中の非人道的道義と倫理を自覚させた。これは「五四運動」時代の知識人の数千年の封建文化に対する鮮明な挑戦の姿を十分に現している。

今日、人々は魯迅や陳独秀等のキリスト教と中国人、中国文化への論説を通して、また中国現代作家の作品を通して、その時代に入り込み、新しい視点を見つけた。それはキリスト教と中国文学の関係である。

林語堂（Lin Yutang, 1895-1976）はこのような関係を十分に表現した。述べることは筆者の修士論文『「世界人」林語堂研究—林語堂におけるキリスト教の受容について』の中に書いたことである。<sup>3)</sup>

### Ⅲ 日本近代文学とキリスト教

宗教と文学の密接なかわり合いは、文学の歴史を通じて常に見られる現象であるが、日本の近代化が欧化という形でおし進められたことは、両者の関係に新たな紀元を画することになった。即ちキリスト教、特にプロテスタントイズムが近代文学の始発に多大の影響を及ぼしたということである。

周知のように、近代日本のキリスト教界をリードしたのは明治初期に結成されたプロテスタントの三つの信仰者集団、横浜バンド（植村正久、本多庸一ら日本基督教会派）、熊本バンド（海老名弾正、宮川経輝ら日本組合教会派）、札幌バンド（内村鑑三、新渡戸稲造ら札幌独立教会派）であるが、近代文学形成期に最も影響力を発揮したのは、前二系列から出てキリスト教ジャーナリズムを形成し、明治二十年代の精神思想界を主導した人々であった。即ち自ら勝れた英文学の紹介者でもあった植村は『日本評論』を出し、また同じ横浜系から出た巖本善治は『女学雑誌』を主宰、この系列からは北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、平田秃木ら『文学界』同人らキリスト教青年が輩出した。一方熊本バンドから出た徳富蘇峰は民友社を起し、『国民之友』『国民新聞』等を発行、ここからは同じく宮崎湖処子、徳富蘆花、国木田独歩らが輩出した。

明治二十年代は、時代の閉塞感とともに、知識青年達が生き方において方向転換をせまられた時期であった。将来への不安は必然的に彼らを安心を求めてさすらせ、宗教の門へと導く。明治二十年前後キリスト教が急速に教勢を伸ばすのも、このような青年の群れの輩出と見合っている。宗教へ向かう心はまた、永遠なるものにつながることで精神の絶対的自由を確保しようとする浪漫的精神と通底する。前述の青年達のほとんどが、当代を代表するロマソチストの群れであったことを思えばよい。しかし、このことは逆に彼らの信仰の根底の浅さをも予測させる。藤村や独歩に典型的なように、キリストは釈迦

やシェイクスピアや西行、芭蕉の徒と同列に並ぶ、いわば永遠なるものの体现者にすぎず、唯一絶対の人格神の信仰は乏しかった。彼らが容易にまた棄教におもむく所以である。

キリスト教と日本近代文学者とのこのような関係は、その後の文学史がしばしば持った宗教的な時代においても、基本的には変わらなかった。例えば大正期になると、その文化主義的風潮の中で、キリスト教が信仰からは離れて教養として求められる一方で、内村鑑三の直接的な指導や「聖書之研究」の影響下から出てきた有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤、長与善郎ら「白樺」派のグループのように、理想主義的ヒューマリズムの中で求められたキリスト教が、結局は自己確立を阻害するものとして捨てられたりするのである。キリスト教が信仰の問題として作家の内部で深く受けとめられるようになるのは、むしろ第二次世界大戦を契機とし、椎名麟三や遠藤周作ら戦後作家の登場を待ってからであった。

#### IV 石川啄木とキリスト教

石川啄木とキリスト教とのかかわりは初期ロマン主義の時代に深く、やがて自然主義、社会主義への傾斜とともに消える。これに汎神論的風土への傾斜という間魘を加えれば、啄木もまた明治期の多くの詩人、作家と同じ道筋を辿ったともいえる。「人間とは、所謂神の如く實在にのみある者でもなく、又現象許りに存する諸々機物でもない。能くこの両界に亘つて全分の調和を成す所に其の標的を有する者である」「如何なる思想と離れも、恐らく此一点の上に立たぬ者はなく」、「吾人は物心二元觀を立して」「此両界の合一的成果に人生の帰趣を求めようとする者である」(「ワグネルの思想」『岩手日報』明36・5・3-5・6・10)<sup>4)</sup>とは、啄木十七歳時の評論に語るところだが、この「物心二元」の「合二」という理念、また夢想がどう破れ、推移してゆくに彼の思想の命運もまたかかっていた。

やがてこの年十二月、啄木の筆名で「明星」にはじめて「愁調」と題した長詩五篇を発表。翌三十八年五月には『あこがれ』が刊行されるが、この処女詩集一卷の随所に我々は聖書の詞句の投影をみることができる。

渾沌霧なす夢より、暗を地に、  
光を天にも劃ちしその曙、  
五天の大御座高うもかへらすとて、  
七宝花咲く紫雲の『時』の輦  
瓔珞さゆらぐ軒より、生と法の  
進みを宣りたる無間の巨鐘をぞ、  
永遠なる命の証と、海に投げて、  
蒼穹はるかに大神知ろし立ちぬ。

『あこがれ』冒頭の序詩「沈める鐘」の第一連だが、最初の二行に旧約「創世記」の〈元始に神天地を創造たまへり 地は定形なく曠空くして黒暗渾の面にあり〉(明治訳(元訳)による)以下の詞句の投影をみることが明らかであろう。また〈五天〉〈紫雲〉〈瓔珞〉など仏教的用語の混在をみることが、透谷ほか明治期の詩篇に多くみるところでもある。同時にその終連をみればどうか。

暗這ふ大野に裂けたる裾を曳きて、  
 ああ今聞くかな、天与の命を告ぐる  
 劫初の深淵ゆたゞよふ光の声。—  
 光に溢れて我はた神に似るか。  
 大空地と断て、さらずば天よ降りて  
 この世に蓮充つ詩人の王座作れ。

—〈劫初の海底より〉〈『秘密』の響き〉、神の託した神秘の理法はひびくが、詩人は〈暗這ふ〉大地にまどいつつ、その〈天与の命〉の語るところを聴かんとする。この時〈詩人〉とは、ついに〈光に溢れて〉〈神に似る〉ものなるか。〈大空地と断て〉と唱いつつ、さにあらずば〈天よ降りて〉この世に栄光と恵みに満ちた〈詩人の王座〉を〈作れ〉という。ここに神を呼ばわりつつ、たとえば透谷『蓬莱曲』のごとき霊肉二元の相剋を問う苦悶の声はない。天の加護によって〈詩人の王座〉を〈作れ〉とよぶ、詩人讃歌の高らかなひびきである。しかし、その〈詩人の王座〉を追われ、夢の破れる日は遠くない。同時に啄木の詩法は、やがて有明、泣重らの象徴詩派のそれを脱皮してゆく。

彼は後に顧みて、「其頃の詩といふものは、誰も知るやうに、空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素（乃至はそれに類した要素）の外には、因襲的な感情のある許りであつた」という。言うまでもなく後期の評論「食ふべき詩」（明42）にいうところだが、たしかに「微弱な宗教的要素」とは、時代と己れを串刺しにしているにがい内省でもあった。もはや例示する余裕はないが、『あこがれ』にみるキリスト教的粉黛はついに宗教的な情調の域を出るものではなかった。『あこがれ』の詩法からの脱皮は同時に、表層的な宗教性からの脱却でもあったはずだが、その「微弱」なる「宗教的要素」はどう沈潜し、底流しつつ、以後の文学と軌跡に点滅していったか。

啄木が聖書やキリスト教にかかわったのは盛岡中学時代とみられ、その校友会誌にキリスト教的情緒の濃い詩的散文、また回覧誌（『爾伎多麻』一号、明34・9）に〈聖歌口にはゝゑみうたふ若き二人二十歳の秋の寂しさをいはず〉〈なにか神のさゝやく如きこゝちしてそゞろ思ひにさまよひゆきぬ〉などの短歌もみられる。また妹光子の盛岡女学校入学時（明38・4）には旧新約聖書を贈り、またその日記に貧苦のなかに蔵書といえば古雑誌、売り残した二、三の詩集とともに「新約全書位なもの」（『洪民日記』明39・3・27）と言い、元日に起き出でては「約翰伝をよむ」（『明治四十丁未歳日誌』明40・1・1）とあるなど、洪民村在住の時期には聖書へのなお深い親近がみられる。とりわけ、その生涯が「渾然たる大詩篇」ともいうべきキリストは「千古の大教育者」という彼自身、三十九年四月からの洪民小学校代用教員時代には生徒の非行や徴悔に対しては「我も爾の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿れ」（『ヨハネ伝』8・11）などの聖句を引いて励まし、また「基督の心を思ひ浮べて泣きぬ」（『明治四十丁未歳日誌』明40・1・9）というなど、自身を、〈真人〉キリストに擬するとき高揚がみられる。ただこの高揚、宗教的蜜月の時期もまた四十年五月、故郷を追われ、北海道時代以後の転変とともに消え去ってゆく。そのロマン主義的志向の終わるは同時に、宗教的高揚の終焉でもあった。

ここに最後の問いが残る。その宗教性からの剥離、離脱の概因とは何か。「万有の根源」

「世界の根本意志」ともいうべき神の力の「分出」こそ「我ら生存」の意義であり、もって「真人」に至る。その「真人」とは「乃ち人に現はれる神」であり、「その光輝は燦として『永遼』の上に灼く」もの。而して「物に於ては詩は乃ち宗教」「信仰は乃ち我生命である」（伊東圭一郎宛書簡，明37・8・3）という。この自我宣揚の宗教観が根源より問われ、打ち碎かれるところに真の回心は生まれるが、啄木にあってその契機はついに訪れなかった。この書簡のいうところが先の『あこがれ』序詩「沈める鐘」の末尾のそれにつながることは明らかなが、〈我はた神に似るか〉〈詩人の王座作れ〉という、〈詩〉と〈位〉の表層的合一の夢想から破れ出た時、晩期独自の詩篇は生まれた。「心の姿の研究」の一連の作（明42）や「詩六章」と題した「あゝほんとに」ほかの連作（明44）などに、近代詩にきざす実在的志向と詩語の肉質への接近の、ある微妙な契機を読みとることができよう。

〈クリストを人なりといへば、妹の眼が、かなしくも、われをあはれむ〉－『悲しき玩具』終末の最晩期の歌だが、我々はこの両者のあわいに、ゾルレンならぬザインの影にたゆたう隠れた神の残像を垣間見ることができよう。

### 注

- 1) 『マルクス選集』（I）中国中央編訳局編集，人民出版社，1970年5月，23頁
- 2) ハイデッカー『詩の中の言葉』，上海訳文出版社，1986年10月，105頁
- 3) 馮羽『人生の旅－世界人林語堂研究』，岩手大学アジア史研究室発行『アジア史の諸問題』，株式会社アイジイ印刷，2000年3月，53－67頁。  
又，馮羽修士論文『「世界人」林語堂研究－林語堂におけるキリスト教の受容について』，（岩手大学大学院人文社会研究科，2000年3月）64－75頁
- 4) 以下共、啄木作品の引用は『石川啄木全集』第8巻（筑摩書房，1978～80年）による。

2000年6月30日 盛岡にて